

幼稚園教育実習における学生の意識変化 — 責任実習・教職実践演習における学びと課題 —

福山 多江子・大澤 洋美

I. 研究の目的

本学の幼児教育科は、幼稚園教員養成課程認定及び保育士養成課程認定を受け、95%以上の学生が幼稚園教諭二種免許・保育士資格を取得し、就職に関しても同程度の学生が幼稚園教諭・保育士資格を生かした職に就いているという現状がある。

平成27年12月には、文科省から幼稚園教諭に求められる資質能力と教員養成段階に求められることとして、3つの能力の必要性が述べられている。(1)幼稚園教諭として不易とされる資質能力、(2)新たな課題に対応できる力、(3)組織的・協働的に諸問題を解決する力である。また、平成30年実施の幼稚園教育要領では、幼稚園教育において育みたい資質能力や、幼児の発達に即して「主体的・対話的で深い学び」に沿っての幼児期の学校教育の充実のための視点が示されている。そして『養成校段階では、幼稚園教育についての基礎的な知識や理解、技能を習得することが課題であるが、これらの習得課程を通して、「実習などいろいろ大変だが、やっぱり子どもが好き」という、子どもに対する温かな関心や感情を持つことである。こうした幼稚園教諭としての成長を見通した上で、その養成校段階で何を理解し身に付けるかを考える必要がある。』と記述されている。このことから幼稚園教諭の資質は、幅広い生活体験や社会体験を背景とした柔軟性やたくましさを基盤として向上させていくことが重要であるとあり、多岐にわたる。このような教員養成を行っていくためには、学生の持っている資質を最大限に生かしつつ、その能力を発揮できるよう、責任実習後や教職実践演習受講前・受講後の課題を検討し、より良い幼稚園教諭を養成する必要がある。

そこで今回の研究では責任実習後に学生にアンケートを行い、参加・観察実習時と責任実習時での望む姿勢の変化、子ども観・保育観で変化した点、課題などを記述させ、その上で教職実践演習時の課題点、その授業を受講して社会人として保育者になるにあたっての意識の変化を分析し、不足している点は何かを考察する。そして今後の保育者養成にどのように反映していくかを研究することを目的とする。

○幼稚園責任実習において体験したこと

- ・どんな手遊びや歌を歌っているか
- ・主活動について
- ・指導案について
- ・適切な指導や援助の方法について

○学生の実習後の意識変化

- ・保育観
- ・実習を終えて幼稚園の先生になりたいか
- ・幼稚園教諭に対するイメージ

○実習で嬉しかったこと・難しいと感じたこと

- 園からの指摘事項
- これからの課題
 - ・教職実践演習受講前の課題
- 教職実践演習後に授業を通して解決されたこと
- 残された課題

II. 研究方法

研究対象：本学幼児教育科平成30年度入学の学生

2年生186名

研究方法：1. 幼稚園教育実習の責任実習後に振り返りのための学修として記述式にて学生が回答したアンケートをもとに分析・考察を行った。
2. 教職実践演習の受講前と受講後の意識について記述した課題を基に分析・考察を行った。

研究期間：2019年6月16日～6月28日

10日間

2019年9月～2020年1月

III. 調査の結果と考察

1. 幼稚園教育実習で体験したこと

・朝のうた

季節のうた（あめふりくまのこ・かたつむり・小さな世界・たなばたさま・きらきらぼし・おたまじゃくし・シャボン玉・かえるのうた・うみ等）

季節のうた以外（うたえばんばん・365日の紙飛行機・大きな古時計・くじらのとけい・おばけなんてないさ等）

・運動会の練習

製作（あじさい・あさがお・ばら・かたつむり・セミ作り・さくらんぼ・七夕の冠作り）

手遊び（はじまるよ・ばんやさん・メロンパン・1と1）

・プール

お弁当のうた

絵本の読み聞かせ

おかえりのうた

○ 指導案についての主な指摘事項

・話し言葉が多いところ。

・指導案を見ただけでは分からないため、具体的に製作物は絵で描いて示す。

・環境構成をしっかりと書く。

・環境構成の机の配置については、理解しやすいよう

に図式化して書く。

・子ども達の予想される姿を詳細に書くこと。

- ・予想される姿を書き、それに対しての対応を書く。
- ・製作の説明の声かけを詳細に書くこと。
- ・マイナスの声かけではなく、プラスのイメージの声かけを記入する
- ・予想される危険も記入する。
- ・先生の言葉かけを記入すると責任実習で役立つ。
- ・子どもの様子についてさまざまな行動を予想し書くようにすること。

○ 適切な指導や援助の方法について

- ・一人一人の子どもを把握し、その子どもに合った適切な援助や言葉かけが必要である。
- ・泣いていて話ができない子どもに対して気持ちをそらすことのできることを行い、切り替えができるようにする。
- ・ただ子どもたちと楽しくいるだけではなく、気が緩みすぎていると見受けられた子どもに対して危険を予想し、確実な声かけを行うこと。
- ・子どもの気持ちを受け止め、否定的な言い方をしないように心がける。
- ・全て保育者が行うのではなく、まずは声をかける、見守る、などをし、援助が本当に必要な時のみ手伝うようにする。
- ・やり方をただ説明するのではなく、子ども達に対して質問などをし、話すことで子ども達も飽きずに聞くことができること。

2. 学生の実習後の意識変化

○ 保育観について

➔ 子どもを援助する際に全ての援助を行うことが良い保育の仕方だと思っていた意識が子どもによって対応の仕方を変える必要があるという意識が見られる。

- ・子どもに対して援助をしすぎず、自分で考えられるようにすることが大切である。
- ・より子ども達主体で保育をすること。
- ・一人一人の性格や得意・不得意を考慮して製作の進め方や援助を考えることが大切である。
- ・観察実習の時には感じる事のできなかつた子どもを預かる責任感があり、仕事の重さを感じた。
- ・全員が同じ動きができるようにするのも大切であるが、3歳児は特に月齢によってもできることが違うため、それぞれに合わせた援助を行うことが大切である。

○ 実習後の今後の課題

➔ 実習直後の振り返りのため、より実践的な課題が多くみられる。

- ・少しの時間や導入の時など使える手遊びのレパートリーを増やす事。
- ・ピアノを練習する事。
- ・園児全体を見渡せるようにする事。
- ・保育技術を増やす事。
- ・様々なことを想定して、何かあったときに慌てずに落ち着いて臨機応変に対応できるようにする事。

- ・子どもの動きや姿、環境構成の想定に关してあらゆるパターンを考え、それに対する対応を予想しておく事。
- ・製作の際に材料を配布するタイミングや量を考える必要がある事。
- ・大きな声を出せるよう発声練習を行う事。
- ・ピアノを弾きながら全体を見渡せるようにする事。
- ・障害がある子、気になる子に対する理解をする事
- ・子どもが何を考えているのか、内面に秘めているものを読み取れる力をつけていきたい事。
- ・子どもが理解できるような発達段階に応じた言葉の伝え方について学ぶ事。

○ 教職実践演習開始時点の課題

➡実習から時間を置いた時の振り返りのため、実践的なことのみではなく、子どもの内面的な部分や方法論が課題として多くみられる。

- ・保育者同士の対応について
- ・幼児理解
- ・日誌・日案について
- ・環境構成について
- ・保育者、保護者、子どもとの信頼関係
- ・ピアノ
- ・手遊びのレパートリーを増やす
- ・自分の思いや考えを文字でうまく表現できるようにする。
- ・子どもの立場に立ち、物事を考えられるようになりたい。
- ・子どもに対応するときの言葉が適切ではない（難しい言葉を使用してしまう）
- ・子どもの発達や状況に合わせた言葉かけを行うこと。
- ・声が小さい。
- ・保育者としての意識や学びを深めていくことができるようにしたい。
- ・主活動最後の子どもへのまとめ方

○ 授業を通して発見した自己課題

➡授業での学びによってより具体的に何を学んだらよいかの視点が定まってきたことが見られる。学んだことによる自己理解が見られ、社会人としての自覚が芽生えてきている様子が見られる。

- ・幼児理解
- ・子どもの姿の全体を見守りながら見て考える。
- ・子どもと同じ視点になって物事を考え、気持ちに気付けるようにする。
- ・子どもの主体性を大切にすること。
- ・自分で考え、課題を見つけ出し、他人に頼らず行動する力を身に付ける。(自主性を育てる)
- ・子どもと関わる上で大切なことや気を付けることなどをもっと理解していかなければならないと思った。

- ・多様な視点で物事や子どもを見て考えること。
- ・子どもの興味や関心に応じて道具や素材などの環境を構成し、遊びの選択肢をより多く保障する。
- ・保護者対応
- ・保育者の役割
- ・社会人としてのマナーを学び、社会人としての行動や言葉遣いなど

○ 課題の中で授業を通して解決された点

➡ 課題がはっきりと見えてきたことで自分自身がどのような視点で学びを捉えればよいか
はっきりとしたことで解決ができたことがうかがえる。

- ・保護者対応のポイントを押さえられた。
- ・幼児理解のポイントを押さえられた。
- ・保育者としての関わり方
- ・こどものことを理解するためにどのようにしていけば良いか。
- ・今後の保育者としての心構え。
- ・自分の考えや思いをうまく文字で表現できるようになった。
- ・事例を通して以前より子どもの立場を考えられるようになった。
- ・指導計画の立て方のコツ。

○ 教職実践演習を受講した後の残された課題

➡ 自分自身が教職実践演習で学んできたことに不足している点において実践的な部分の学び
が大部分を占めていることがうかがえる。

- ・実際の保護者対応
- ・保育計画のしかた
- ・実際のトラブル対応
- ・ピアノをうまく弾けるようになること。
- ・実際に子どもだけでなく保護者の関わりなど。
- ・子どもに関するエピソード記録の書き方。

●これらの結果から考察すると、学生たちは実習直後の振り返りにおいて、より実践的な項目についての課題が多数みられることが考えられる。この時期ということで学生自身が実際に責任実習として保育を行った直後であったために実際に子どもたちとの触れ合いの中で感じた点である実践的な手遊び、ピアノ、保育技術、大きな声を出せるようにするなどの課題が多く上がったのであろう。

●教職実践演習開始時点の振り返りにについては、実習直後と相違がみられる。直後に関しては実践的な課題が多数であったが時間を置くことにより、幼児理解、子どもの発達に応じた言葉かけ、子どもの立場に立ち、物事を考えられるようになりたい、保育者としての意識や学びを深めていくことができるようになど、子どもに対する理解や保育の方法など、実践的な課題のみならずこれから机上で学ぶことにより深められる課題が多数上がっていることが特徴的である。

●授業を通して発見した自己課題に関しては、授業で社会人としてのマナー、乳幼児理解、

文章能力アップ、指導案作成、保育者の役割などの学びを深めたことにより学生自身の学びの項目が明確化され、より具体的な項目が増加したことが見受けられる。

- 課題の中で授業を通して解決された点に関しては、振り返りを行い学生自身の学びの視点が定まったことで苦手な部分がより鮮明に理解できたことによりピンポイントで学ぶことができ、深い学びに向かえたことが見受けられる。
- 教職実践演習を受講した後の残された課題に関しては、実際の保護者対応、実際のトラブル対応、ピアノをうまく弾けるように、子どもに関するエピソード記録の書き方、など、実際の現場に行き、学ばなければならないことが大部分を占め、この科目の課題にも関係している点ではないかと考えられる。

*** 保育者としてのスキルアップに向けた自己課題への取り組み（学生の文章を抜粋）**

学生Aの記述

私の自己課題は「多様な視点で物事や子どもを見て考えること」「子どもの興味や関心に応じて道具や素材などの環境を構成し、遊びの選択肢をより多く保障する」ことです。

「多様な視点で物事や子どもを見て考えること」を克服するためには、日ごろから子どもの遊んでいる姿や生活する姿をよく観察すること、子ども一人一人としっかり丁寧に関わり、性格を理解し、何を感しているのか、何を考えているのかを感じ取るようにすること、豊かな感受性を持つことが大切であると考えます。

「子どもの興味や関心に応じて、道具や素材などの環境を構成し、遊びの選択肢をより多く保障すること」に関しては、一つ目の課題と同じように日頃から子どもの遊んでいる姿をよく観察することが重要であると考えます。

また、子どもにこのような体験をしてほしい、味わい楽しんでほしいという願いを持ち、今の発達段階よりも少し上のレベルの道具や素材の準備をして挑戦できるようにし、今の遊びをさらに発展させることができるように道具や素材の準備をして環境を構成していくことで遊びの選択肢がより保障されると思います。

これらのことを克服し、現場に出て保育者としてスキルアップできるようにすること、自分のなりたい保育者像に少しでも近づけるように楽しみながら日々頑張っていきたいと思います。

この学生の記述から保育者としてのスキルアップに向けた自己課題への取り組みは、2点に縛られている。「多様な視点で物事や子どもを見て考えること」「子どもの興味や関心に応じて道具や素材などの環境を構成し、遊びの選択肢をより多く保障する」は、2年間の学びを集約したものになっていると考えられる。日ごろから子どもの遊んでいる姿や生活する姿をよく観察するという文言は、幼児理解や環境構成、幼児の主体性を重要であると考え、学びとしてより深く向かわなければならない部分として提示している。これに関しては深い学びを行ってこなければ表現できない言葉ではないかと推察される。「遊びをさらに発展させることができるように道具や素材の準備を行う」という文言も、保育者にとって子どもの主体性を大切に、遊びを発展させるためには、いかに保育者の環境構成が重要であるかと

いう環境を通しての保育という学びができているからだと推察される。

学生Bの記述

教職実践演習の15回の授業を通して保育者としての子どもへの関わり方や姿勢について学んだことや新たに気付いたことが沢山ありました。そして、残された私の課題は保育の現場に出て経験を積みながら学んでいくことだと気づきました。また、今までの授業の中で解決した課題もありますが、保育現場でこれから学ぶことは沢山あると思います。その中でも保育者として一番大切にしたいことは、子ども達と共に成長する保育者になる事です。園で生活していく上で、子ども達とコミュニケーションを取り、心に触れて関わり合うことで信頼関係を築いていきたいと思っています。子どもたちにとって愛着形成は重要であり、生きる力につながることを学びました。どのような時でも子ども達に寄り添い、一人一人の気持ちを受け止めていきたいと思っています。

また、子ども達の心理だけではなく、保護者の理解にも努めていきたいと思っています。実習では経験していないことなので、保育現場で実際に保護者から悩みを相談された際や、様々なトラブルに対して応えられるかが不安です。そのためには、小さなことや子ども達の様子や成長を伝えることで信頼関係が生まれるのではないかと考えます。また保護者に対して共感する心、傾聴する心、寄り添う心を忘れずに親身になって自分なりの言葉で伝えたいと思います。今まで大学2年間で学んできたことを振り返り、4月から保育者として頑張っていきたいと思っています。

「園で生活をしていく上で、子ども達とコミュニケーションを取り、心に触れて関わり合うことで信頼関係を築いていきたいと思っています。愛着形成は重要であり、生きる力につながることを学びました。どのような時でも子ども達に寄り添い、一人一人の気持ちを受け止めていきたいと思っています。」という文言も、人間関係においてコミュニケーションをとり信頼関係を築くことの大切さを学んでいる。

また、保護者理解においても保育現場での経験は殆どない中で、机上での学びにおいて事例によりケーススタディーを学びどのようなことで保護者との信頼関係が築けるのかが理解できていることが推察される。そして保護者に対して「共感する心、傾聴する心、寄り添う心を忘れずに親身になって自分なりの言葉で伝えたいと思います。」という文言もまさに保護者対応を学んだ学生のみには表現できるものであると考えられる。実習では保護者対応に関しての学びは殆ど不可能であると考えられるため、教職実践演習における保護者対応のケーススタディーが重要であると思われる。

学生Cの記述

私の理想とする保育者像は、子どもや保護者にとって安心できる存在となる、子どもたちにとって園で生活することが楽しい、好きと感じてもらえる保育を行うことができる保育者です。理想とする保育者に近づくために行うべきことは二つあります。一つ目は保育の振り返りを行うことです。日常で保育をしている時は振り返る暇はありません。

そのため、保育時間後に自分自身や子どもの姿を丁寧に省察し、ノートに書き留めておきます。この取り組みを行うことで、次の保育につながることはもちろん、何年後かに同じ状況に悩んだ時も見返すことができます。そして文章を書くことなので私の苦手とする文章表現力向上にも役立ちます。二つ目は、他の保育者がどのような保育を行っているか観察することです。保育中は自分自身や子どもに夢中になってしまうことが多いのです。しかし少し視野を広げ、他の保育者と子どもの関わり、声かけの仕方などに注目してみることで、自分の保育とは違う方法や新たな保育方法を発見することができます。最初はそのような余裕はないと思いますが、思い出したときに行っておくべきだと思います。

これらのことを積み重ねることで、すぐにはいかないかもしれないけれど数年後には必ず自分の身になると考えます。そのためきちんと実践し、保育者としてのスキルアップができるよう努力していきたいと思います。

「一つ目は保育の振り返りを行うことです。日常で保育をしている時は振り返る暇はありません。そのため、保育時間後に自分自身や子どもの姿を丁寧に省察し、ノートに書き留めておきます。この取り組みを行うことで、次の保育につながることはもちろん、何年後かに同じ状況に悩んだ時も見返すことができます。……私の苦手とする文章表現にも役立ちます。」

保育における振り返りの重要性を良く理解できていると考えられる。保育において子ども取って充実した保育を行うためにはその日の保育の振り返りを十分に行い、翌日に活かすことが重要であることをしっかり学んでいることが推察される。PDCA サイクルを行うことで子どもにも保育者にも翌日の保育を有意義なものにできるという学びが十分にできていると考えられるからである。また、「少し視野を広げ、他の保育者と子どもの関わり、声かけの仕方などに注目してみることで、自分の保育とは違う方法や新たな保育方法を発見することができます。」という文言も自分自身の保育のみではなく、他の保育者の保育を見て学びたいという気持ちを表現しており、保育者になっても学びの意欲を忘れない気持ちが表れていると思われる。

3. 考 察

責任実習後に学んだことに関しては、保育者の援助の仕方を的確に観察し、解釈している点が主な点である。観察実習時には記述されていなかった子どもの内面を保育者が読み取り、それに応じた援助を行っている点や、子どもの気持ちを受け止める事の重要性、一人一人に対し確実に子どもを理解し、その子どもに合った対応を行うことなど、事実のみを観察するだけでは理解できない学びができていたように感じられた。

課題に関しても、多様な保育技術の獲得（手遊び、ピアノ）や、保育時間の中で余った時間をどううまくつなげていくか、環境構成のあらゆるパターンを想定し、それに対する対応を予想しておくなど、実際の現場で働く際の現実的な観察力が備わってきていると感じた。

これらのことに加え、教職実践演習で学んだことにより技術的な事のみならず子どもの遊びの種類や楽しいと感じているという外見のみの判断で保育をするのではなく、その時の子どもの様子や心の動きのような内面の部分をじっくり観察することの重要性を乳幼児理解、

保護者に対する対応の仕方についてケーススタディーを基に理解すること、環境構成の重要性を幼稚園教育要領・保育所保育指針中の環境を通しての保育や環境構成の仕方をどのように行うか、社会人としてのマナー、保育者としての資質、など机上において十分に学べたのではないかと推察される。

ただ、不足している部分として実際の現場での体験ということになる。教職実践演習において園見学の項目があり、実習以外にも現場で学ぶことの時間を設けてあるが、時間的には不足しているのではないかと考えられる。また、実践力（保育技術面）において学ぶ時間が不足していることがうかがえるため、保育に関してのロールプレイを試みるなどより現場に近い場を想定して学生たちを学ばせる必要があると考えられる。

このように学生は実習、教職実践演習を学んだ後に社会人として保育者になることに向けての意識は確実に変化しており、その心構えと自覚を持ち、今後の課題を明確にし子どもに真摯に向かい、より良い保育者になるということがはっきりと表れていることが理解できた。

今後は1学年と2学年の学生についての意識の違いについて分析し、保育者になるための学生の学びを研究していきたいと思う。

